|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| スライド 1 |  | では、ブックレットより通常の学級の取り組みについて紹介します。 |
| スライド 2 |  | 今回の研究で実践収集を行い、実践を整理していく中で「集団へのアプローチ」を行っていくには、大きく二つの視点が大切であると考えました。  視点の一つ目は、「それぞれに共通する困難さを共有できるようにつなげる」です。  一人一人の子供の困難さを教師が理解するだけでなく、子供と共有しながら、子供同士をつなげていこうとする視点です。  視点の二つ目は、「集団として大切にしたい価値観について子供と考える」です。  教師の子供一人一人を理解を前提にして、集団の寛容度を高めるために大切にしたい価値観について子供と考えていこうとする視点です。  今回は、この二つの視点から通常の学級における実践について紹介したいと思います。 |
| スライド 3 |  | まず、紹介する事例の概要についてお話をします。  小学校第3学年の学級での話です。  特別支援学級のAさんが、交流学級での給食当番をうっかり忘れてしまった時に友達に「さぼっている」と指摘され廊下で固まっている状況です。  その時、担任の先生がいつもと様子の違うAさんに対してどのように関わったのでしょうか。また集団に対してどのように関わったのでしょうか。 |
| スライド 4 |  | 廊下でうずくまるAさんがいました。それを見た担任の先生は、  「このような状況の時、何かに困っているのだろうな。」  「自分の気持ちを言葉で表現することが苦手だから、伝えられずにいるのかな。どうすればよいのか分からず、気持ちを切り替えられないのだろうな。」というようにいつもとは違う様子から、Aさんの行動の背景や気持ちを理解しようとしていました。  担任の先生は日頃から子供の様子をよく把握しているからなのでしょうか。Aさん自身に何が起こったのか思いをめぐらすことができていました。 |
| スライド 5 |  | そして、担任の先生は、Aさんに何があったのかを尋ねてみました。  すると、Aさんは、「さぼろうとしたのではない」ことや言葉でうまくいえなくて、困っていたことが分かりました。  それを聞いた担任の先生は、「やっぱりそうだったのか。さぼろうとしたのではないことや反省している気持ちも周囲の子供に理解してほしいな。」と考えました。  つまり、担任の先生は、Aさんがどうして廊下でうずくまる状況になったのかを先生自身が理解するだけではなく、Aさんの事情やしんどさを学級の友達にも共有したいと思ったのです。 |
| スライド 6 |  | 「月曜日で給食当番をうっかり忘れたようなんだよ。」  また、「注意されても、うまく説明ができなくてつらい気持ちになったんだよ。」  とAさんに何があったのかを周囲の子供たちに伝えました。  すると、子供たちは、  「僕もたまに忘れることはあるよ。」  「言いたいけれど、気持ちを伝えられないことって私もあるよ。」とAさんの困難さの共有をしていく中で、自分自身の経験と重ね合わせて話をする子供たちの姿が見られたのです。 |
| スライド 7 |  | 「今、廊下でじっとしているのは、うまく言いたいことが伝わらなかったからだね。」  「教室に戻ってきてほしいけれど、みんなはどうすればよいと思う？」  と周囲の子供たちに問いかけ、一人一人にどう関わればよいかを考える場をもちました。  子供たちは、「さぼっていないことは分かっているよと伝える。」「自然にする。」と自分にできる関わり方を考えました。  「友達に何かあった時には、『なぜ、そうなったのか』『自分はどうすればよいのか』を考えることが大切だね。」と担任の先生は最後に語ることで一人一人がその時自分に何ができるのかまで考えてほしいという思いを伝えていました。 |
| スライド 8 |  | さて、この事例で担任の先生は、何を大切にしていたのでしょうか。  まず、一人一人の子供を理解することです。日常生活から子供の困難さ、物事の捉え方等を理解した上で子供が何に困っているのかを考えて、関わろうとしていました。また、担任の先生自身が子供を理解するだけではなく、その子の困難さについて子供たちと考えようとしていました。先生が「理解しましょう。」「理解しないといけないね。」と諭すのではなく、子供たちがAさんの困難さについて共有することで、「自分にもあるよ。」というように自分事として考えることにつながっていったのです。さらに困難さの共有にとどまらず、その時「自分は、どう関わるのか」について子供が考えられるように問いかけることで、理解や共有にとどまらず、どのように行動するかまで考えていくことを大切にしていました。 |
| スライド 9 |  | 次に紹介する事例５の概要についてお話をします。  小学校第５学年の学級での給食時間の話です。  給食時間終了前の片付けの時間に、好きなデザートに手を付けずに返却をしようとする児童とその行動を当然のように捉える学級集団とのエピソードです。  担任の先生がルールの適用についての価値観を話題にして、学級集団にどのように関わったのかがポイントになっている事例です。 |
| スライド 10 |  | 給食の片付けの時間に給食を食べることに時間のかかった児童のトレイにはふたを開けただけで全く手を付けていないデザートがありました。  「どうしたの。それ嫌いなの？」と尋ねると  「いいや、好き。でも、時間がきたからやめた。時間がきたら食べたらいけん。」と児童が答えました。）  担任は、  「時間やルールを守ることは大切なことですが、あまりにも徹底しすぎている気がするな。」  と違和感を感じています。そもそも「ルールを守りましょう。」という指導をしているはずの担任の先生がなぜ、違和感を感じたのでしょうか。 |
| スライド 11 |  | さらに、学級集団全体が、  「昨年からのクラスのルールだから。」  と何の迷いもなくそのように話す学級集団の様子に  「ルールは大切ですが、状況や場面によってしなやかにルールを捉える柔らかさのある学級集団の寛容さもあるといいな。」  とその様子を捉え、学級全体に関わろうと考えたのです。  つまり担任の先生は、「幅のあるルールの適用もあってもよい」という価値観が学級集団にあれば、事情や状況も加味しながら柔軟に友達と関わることができるようになるのではと考えたのです。 |
| スライド 12 |  | そこで、先生は、「幅のあるルールの適用」について子供たちと考えたいと思い、片付けが開始になった時にまだ食べられるものがあった場合、どうしたらいいか今一度、学級全員で考える場をもちました。  話し合いでは、子供たちは、いろんな立場や状況から考えはじめ  「やっぱり、ごちそうさまに間に合わなくなるから今のままでいい。」とか  「食べられるのであれば、少しくらい待ってあげてもいいのでは…。」等ルールや当事者の事情、その時の状況を関連させながら意見を出し合いました。 |
| スライド 13 |  | そして一つの視点からだけでなく「ルール」「事情」「状況」に折り合いをつけながら話を進め  「片付けが開始時刻になっても、もし自分で食べられるものがあるならば、急いで食べればよいのでは…。」  という「学級集団の納得」する意見にたどり着きました。  担任の先生は、集団の寛容度を高めるために学級集団に対して「大切にしたい価値観」について子供と考えるだけでなく、「学級集団の納得」を積み重ねていくことを大切にしていたのです。 |
| スライド 14 |  | ルールを守って生活をすることはとても大切なことです。しかし、すべての事象に厳格にルールを適用したり、指導の根拠としたりするとどうでしょうか。ルールを守ることが過度に強調され、守れない人を許せないという価値観を生み集団の寛容度を低下させる可能性もあります。だからこそ担任の先生は、「幅のあるルールの適用もよい」と思えるような多様性を認める集団づくりを支える価値について子供たちと考えようとしていたのです。また、ルールという一つの視点からその行動や人を判断するのではなく、複数の視点から見方や考え方を広げて部分的な良さに注目できるようになることも、多様性を認め合う集団につながっていくと考え、子供とともに考えていったのです。 |
| スライド 15 |  | 「多様性を認め合う集団づくり」で大切なことは、  「子供を理解する」ことです。子供一人一人の得意、不得意や困難さ、表現方法等を教師が把握することで、行動の背景要因やその状況下で子供に何が起こっているのかを理解することです。また、教師が子供の理解をするだけでなく、子供と困難さによって生じる一人一人のしんどさを共有することです。ただし、子供を理解をしていく上で、これまでの特別支援教育で大切にしていた実態把握も大切に行う必要があります。  次に「大切にしたい価値観」について子供と考えることです。多様性を認め合う集団づくりを進めていく上で、「大切にしたい価値観」を話題に子供と考えていくことが大切です。例えば、今回紹介したもの以外にも「一人で全部できなくてもよい集団の価値観」「いつも１００％の力が発揮できなくてもよいという集団の価値観」等があります。もちろん、そのほかにも状況や場面により子供と考えていきたい価値観はあると思います。 |
| スライド 16 |  | つまり、子供を理解し、子供と大切にしたい価値観について考えることで集団の寛容度が高まり多様性を認め合う集団につながっていくと考えられます。そのような集団の中では、互いに「認めたり認められたり」、「助けたり助けられたり」する経験を積み重ねることができます。そして、集団を構成する一人一人が考えたり、直接体験したりしたからこそ、受容的で親和的に友達と関わろうとする姿につながると考えられます。さらに、一人一人の困難さを軽減させることにつながっていくと考えられます。しかし、このような集団づくりの基盤となっているものは、「教師と子供の関係性」であるといえます。この「関係性」を構築するには、先ほども説明した「子供を理解すること」が大切になってきます。子供を理解し、関係性を構築するためには、具体的にはどんなことができそうでしょうか。日常の中で意見交換をしてみるのもよいと思います。 |